九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

ジッドの『放蕩息子の帰宅』 : 状況に想をえた小品 (2)

吉井, 亮雄 北海道大学言語文化部助教授

https://hdl.handle.net/2324/19381

出版情報:流域. (26), pp. 37-45, 1989-04-18. 青山社

バージョン: 権利関係:

ジッドの『放蕩息子の帰宅』(I)

----「状況に想をえた小品」----

吉 井 亮 雄

論での便宜を考えて、原文で引用する。 言(préambule)とでも呼ぶべきもので始まる。これを、以下の議 行)

6

J'ai peint ici, pour ma secrète joie, comme on faisait dans les anciens triptyques, la parabole que Notre Seigneur Jésus-Christ nous conta. Laissant éparse et confondue la double inspiration qui m'anime, je ne cherche à prouver la victoire sur moi d'aucun dieu — ni la mienne. Peut-être cependant, si le lecteur exige de moi quelque piété, ne la chercherait-il pas en vain dans ma peinture, où, comme un donateur dans le coin du tableau, je me suis mis à genoux, faisant pendant au fils prodigue, à la fois comme lui souriant et le visage trempé de larmes. [475]

ヴァリアントによって裏付けられよう(CJtáng、ヘンtáng)。 現に注目したい。この言葉は、作品解釈の核として、しばしば論議 現に注目したい。この言葉は、作品解釈の核として、しばしば論議 現に注目したい。この言葉は、作品解釈の核として、しばしば論議 の対象となってきたが、作者ジッドの思想的側面を考慮に入れて、 この印象が の対象となってきたが、作者ジッドの思想的側面を考慮に入れて、 という表

[En ce temps] (Comme au temps) où le Christianisme au paganisme [na] renaissant se mêlait [on voyait à la fois Vénus et la Vierge sourire] [;] je laisse, ici [de même], éparse et confondue la double inspiration qui m'anime (...)

ト、とりわけそとに含まれる《le Christianisme》という語によっそれにしても依然として疑問は残る。すなわち、このヴァリアン

の二項対立では、グレマス的概念操作を用いて、一節が捨てられた理カンカロンは、グレマス的概念操作を用いて、一節が捨てられた理力といっこの不備を解消するためには、ローマの異教の対立項として、共別とヴィーナス)の対比」を考案した。しかし、この二項対立では、物語のなかに同時に認められる「カトリシスムとプロテスタンチスムというもう一つ別の対比」を考案した。しかし、とプロテスタンチスムというもう一つ別の対比」を考案した。しかし、この不備を解消するためには、ローマの異教の対立項として、対期キリスト教が同時に衝突していたユダヤ教を図式に加えるべきだが、作家は、そういう歴史的かつ包括的な「あり得べき構造を予測しながらも」、他に有効な手段が見つからず、やむをえず問題の一個しながらも」、他に有効な手段が見つからず、やむをえず問題の一個しながらも」、他に有効な手段が見つからず、やむをえず問題の一個しながらも」、他に有効な手段が見つからず、やむをえず問題の一個しながらも」、他に有効な手段が見つからず、やむを構造を予測しながらも」、他に有効な手段が見つからず、やむを構造を予測しながらも」、他に有効な手段が見つからず、やむを構造を予測しながらも、他に有効な手段が見つからず、やむを持つない。

ここにその一端が窺われるジッド独特の異教=キリスト教的姿勢をとことにその一端が窺われるジッド独特の異教=キリスト教的姿勢をでなき、彼が以後もたびたびキリスト教/異教という大きな二分法でおき、彼が以後もたびたびキリスト教/異教という大きな二分法が本来、カンカロンの言うような二つの要素の「対立」などではなるまが本来、カンカロンの言うような二つの要素の「対立」などではなるまかでで、間値に微笑む(à la fois […] sourire)」といった表現によって、問題に微笑む(à la fois […] sourire)」といった表現によって、問題に微笑む(à la fois […] sourire)」といった表現によって、問題に微笑む(à la fois […] sourire)」といった表現によって、問題に微笑が、ジッドの文字を表示している。

ックに宛てた手紙であろう。
はるジャムに対し決然たる態度表明をするまさに数日前に、彼がべ迫るジャムに対し決然たる態度表明をするまさに数日前に、彼宗を六年四月二十九日、つまり、第3節ですでに述べたように、改宗を正確に把握するのに恐らく最も有益な手掛かりとなるのは、一九○

[…] [他者の] 切迫した苦悩の状態に応える感情をもちあわせ が流した涙にぬれているのだから……。 (4) が流した涙にぬれているのだから……。

言に使われているのも偶然ではありえない。ここから翻って、削除を図っている。自らの「矛盾」は認めながらも、彼は、聖なる怒りを図っている。自らの「矛盾」は認めながらも、彼は、聖なる怒りに駆られた「カトリック作家」があまりにしばしば失ってしまう憐恨と愛を有するというまさにその一事において、自分がキリストと直接に結ばれていると主張するのである。したがって、「涙にぬれてでtrempé de larmes)」という同一の表現が、物語のなかに「読者が求めたとしても無駄ではない信仰心」の証として、「放蕩息子」の序求めたとしても無駄ではない信仰心」の証として、「放蕩息子」の序求めたとしても無駄ではない信仰心」の証として、「放蕩息子」の序述を持つれているのも偶然ではありえない。ここから翻って、削除さことでジッドは、相反する二要素の「まざり合い」という、削除さことでジッドは、相反する二要素の「まざり合い」という、削除さことのである。

された一節の意味も明瞭になろう。すなわち、そこで使われている された一節の意味も明瞭になろう。すなわち、そこで使われている 会別 による福音を意味して真正の教え、「法」ではなく「愛」による福音を意味している のである。以上を考え合わせると、問題の一節は、少なくともそるのである。以上を考え合わせると、問題の一節は、少なくともそるのである。以上を考え合わせると、問題の一節は、少なくともその宗教的な内容においては、ベック宛書簡に見られるジッドの姿勢の宗教的な内容においては、ベック宛書簡に見られるジッドの姿勢の宗教的な内容においては、ベック宛書簡に見られるジッドの姿勢の宗教的な内容においては、ベック宛書簡に見られるジッドの姿勢の宗教的な内容においては、ベック宛書簡に見られるジッドの姿勢の宗教的な内容においては、大学に表われている

でにある程度示唆されていると考えられなくはないのだから。でにある程度示唆されていると考えられなぜなのか。この点にも説明的な記述が作品の意味を宗教問題・教会批判のみに還元してしまた。恐れがあると判断したのではあるまいか。しかも、彼の「断固たる異教徒的態度」について言えば、序言の決定稿においても、ブレる異教徒的態度」について言えば、序言の決定稿においても、ブレる異教徒的態度」について言えば、序言の決定稿においても、ブレる異教徒的態度」について言えば、序言の決定稿においても、ブレる異教徒的態度」について言えば、序言の決定稿においても、ブレる異教徒的態度」について言えば、序言の決定稿においても、ブレる異教徒的態度」について言えば、序言の決定稿においても、ブレでにある程度示唆されていると考えられなくはないのだから。でにある程度示唆されていると考えられなくはないのだから。

先立ち、穏やかながらも次のような反論をしているのである。 た立ち、穏やかながらも次のように、覚が高い大力を引起いったものについて、同じく序言の内容に絡めて若干の考察をしておきたい。彼は、その作品がただ美学的見地からのみ判断されるととを望み続けたにもかかわらず、「読者が主人公たちの各々の意見表明に「作者の」個人的な信条告白を見ようとする」に、6821 ことをしばしば嘆かざるをえなかった。『放蕩息子』の場合も決して例外ではない。 作品の出版後まもなくベックから批判的な感想を受け取った彼は、その返信 「既当」において、同作の成立事情を説明するにた立ち、穏やかながらも次のような反論をしているのである。

題が含む悲壮をすべて取り込んで、提示したと思っています。問題の多様な側面をかなり雄弁に、そして抽象的にではなく、問品として完成しているかどうかというととなのです。私はそこに、るのではないでしょうか。私にとって重要なのは、それが芸術作るのではないでしょうか。私にとって重要なのは、それが芸術作るのではないでしょうか。私にとって重要なのは、それが芸術作

いう表現で、ジッドは一体なにを言わんとしているのだろうか。あしかし、あまり簡単に自分とは同一視してほしくない「一人称」と

らゆる二者択一の拒否を標榜する彼自身は帰宅、家出のいずれも選らゆる二者択一の拒否を標榜する彼自身は帰宅、家出のいずれも選らゆる二者択一の拒否を標榜する彼自身は帰宅、家出のいずれも選らゆる二者択一の拒否を標榜する彼自身は帰宅、家出のいずれも選らがるこ者択一の拒否を標榜する彼自身は帰宅、家出のいずれも選らがある。

この問いに答えるためには、『背徳者』出版の時期に遡ってみる必要があろう。なぜならば、ベックにしたのと同種の反論を、ジッドがとりわけ頻繁に繰り返し始めるのがこの時期だからである。読者がとりわけ頻繁に繰り返し始めるのがこの時期だからである。読者は、「客観性の切り札は、小説家に他者から〈私〉を借りるのを許すことである」に、759」という意味において、その主観的・告白的な性なとである」に、759」という意味において、その主観的・告白的な性格にもかかわらず、ジッドの「最初の〈客観的〉小説」と言うべきなめだが、当時の読者は主人公ミシェルに作者のイメージ、忠実ではあるが、あまりに一面的なイメージを求めるのに終始し、ジッドがあるが、あまりに一面的なイメージを求めるのに終始し、ジッドがあるが、あまりに一面的なイメージを求めるのに終始し、ジッドがあるが、当時の読者は主人公ミシェルに作者のイメージ、忠実ではあるが、当時の読者は主人公ミシェルに作者のイメージ、忠実ではないが、当時の読者は主人公ミシェルに作者のイメージ、忠実ではないであるが、当時の読者は主人公ミシェルに貸し与えている(あるいは、初版刊行の半年る)〈私〉に関する誤解を断ち切ろうと、ジッドは、初版刊行の半年る〉〈私〉に関する誤解を断ち切ろうと、ジッドは、初版刊行の半年る〉〈私〉に関する誤解を断ち切らないという言葉を表している。

[...] que Michel triomphe ou succombe, le « problème » continue d'être, et l'auteur ne propose comme acquis ni le triomphe, ni la défaite.

Au demeurant, je n'ai cherché de rien prouver, mais de bien peindre et d'éclairer bien ma peinture. [368]

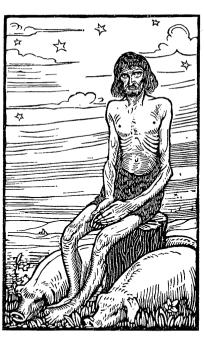
るが、対象は、明らかに、物語のなかに登場するもう一つの〈私〉、 神の沈黙と躍動を対話させ」口,237]ようとしたジッドが採った文 うジッドの美学的要請に、やはり語りのレベルで、しかしはるかに 象的にではなく、問題が含む悲壮をすべて取り込んで」伝える役目 らさまな自己投入と雄弁な言説によって、ジッドの信条告白を「抽 作中作家エドゥワールにすでに幾分似て、この寓話の話者は、作品 る。それでは、この自己異化の対象とはなにか。次節で具体的に見 んで、この語りの二重性とそが、虚構の枠組のなかで自律的に、「精 目立たない方法で、応えているのである。物語全体の対話形式と並 を果たす一方、同時に、この告白の「多様な側面」を保持するとい したベック宛書簡の表現を借りて言えば、彼は、登場人物へのあか の二重の狙いに合致した使命を帯びているのだ。つまり、先に引用 <<p>〈私〉なのである。「視点の多様性」を意図された『贋金つかい』の 語りの前面に姿を現わし、高揚を隠さず放蕩息子の感情を共有する で、なによりも自分自身と距離を置くことを予告しているからであ て、自分自身の勝利も、敗北も証明しようとは思わないという言葉 た「序言」(第6節冒頭で断わったように、筆者はあくまで便宜上とう呼ぶ)におい のに対し、『放蕩息子』の〈私〉の方は、フィクションに組み込まれ く登場しない存在)が虚構の登場人物と距離を置くと宣言していた <<p>〈私〉」への照合によって成立し、フィクションそのものにはまった

学的戦略と言わねばなるまい。

8

例を二、三挙げよう。まず、最初の一節を原文で眺めると―― 別を二、三挙げよう。まず、最初の一節を原文で眺めると―― 別わさないという意味で――のうちに、聖書の寓話「ルカ伝、「五・一 現わさないという意味で――のうちに、聖書の寓話「ルカ伝、「五・一 スーニニ」を、総体的には忠実に繰り返す。しかし、そこには同時に、ホーニニ」を、総体的には忠実に繰り返す。しかし、そこには同時に、ホーニニ」を、総体的には忠実に繰り返す。しかし、そこには同時に、
「一人私〉が姿を息子」と題された第一章の前半部は、客観的な描写―――〈私〉が姿を息子」と題された第一章の出答という流れをとらえれば、たしかに

Lorsque, après une longue absence, fatigué de sa fantaisie et comme désépris de lui-même, l'enfant prodigue, du fond de ce dénuement qu'il cherchait, songe au visage de son père, à cette chambre point étroite où sa mère au-dessus de son lit se penchait, à ce jardin abreuvé d'eau courante, mais clos et d'où toujours il désirait s'évader, à l'économe frère aîné qu'il n'a jamais aimé, mais qui détient encore dans l'attente cette part de ses biens que, prodigue, il n'a pu dilapider—l'enfant s'avoue qu'il n'a pas trouvé le bonheur, ni même su prolonger bien longtemps cette ivresse qu'à défaut de bonheur il cherchait. [476]



彼がひそかに敗北の告白をするのを許す薄暮のなかでの帰宅なのでを含む時況従節ただ一つによって、後に繰り広げられる諸テーマのを含む時況従節ただ一つによって、後に繰り広げられる諸テーマのを含む時況従節ただ一つによって、後に繰り広げられる諸テーマのを含む時況従節ただ一つによって、後に繰り広げられる諸テーマのを含む時況従節ただ一つによって、後に繰り広げられる諸テーマのを含いを見事に表現するのである。また、丘の上での煩悶を経た彼めらいを見事に表現するのである。また、丘の上での煩悶を経た彼めらいを見事に表現するのである。それ自体が六つの関係詞節との文章の文体上の意図は明白である。それ自体が六つの関係詞節との文章の文体上の意図は明白である。それ自体が六つの関係詞節との文章の文体上の意図は明白である。それ自体が六つの関係詞節との文章の文体上の意図は明白である。それ自体が六つの関係詞節との文章の文体上の意図は明白である。

な修正を施されているのである。 指摘したように、寓話の個人的性格と後の進行に適うための、微妙とれを迎える父のあいだに交される会話も、すでにジャン・ギゲがある。さらに、時をかせぎ、夜陰にまぎれて家に着いた放蕩息子と

太蕩息子は帰宅した。聖書の寓話は、兄の狭量に対する父の諫めた、悔い改めた者への慈愛という教訓で終わる。しかし、ジッドのと、悔い改めた者への慈愛という教訓で終わる。しかし、ジッドのと、悔い改めた者への慈愛という教訓で終わる。しかし、ジッドのと、悔い改めた者への慈愛という教訓で終わる。しかし、ジッドのと、同じ屋根の下にいる二人の対照的な登場人物を前もって紹介しろ、同じ屋根の下にいる二人の対照的な登場人物を前もって紹介しろ、同じ屋根の下にいる二人の対照的な登場人物を前もって紹介し、同時に、物語の中核をなす四つの対話を動機づけることにある。し、同時に、物語の中核をなす四つの対話を動機づけることにある。し、同時に、物語の中核をなす四つの対話を動機づけることにある。し、同時に、物語の中核をなす四つの対話を動機づけることにある。し、同時に、物語の中核をなす四つの対話を動機づけることにある。と、第一の段落は、「愛より秩序を好む」と「空へ昇るかがり火」に象で、第一の段落は、「愛より秩序を好む」と「空へ昇るかがり火」にある。他方、第一の段落は、「変という教訓で終わる。しかし、ジッドのと、「ない」というない。

ことを、私は知っている。「傍点引用筆者」 弟が、これから夜の明けるまで一晩中、どうしても眠れずにいる第が、これから夜の明けるまで一晩中、どうしても眠れずにいる 「放蕩息子」の章を閉じるこの文中での〈私〉の登場はとりわけ重要である。なぜならば、それまでの長い客観的描写を支えてきたものである。なぜならば、それまでの長い客観的描写を支えてきたものである。なぜならば、それまでの長い客観的描写を支えてきたものの存在を、読者が初めてはっきりと意識するのは、恐らくこの小さな指標によるからである。言うまでもなく、この〈私〉は、「登場人な指標によるからである。言うまでもなく、この〈私〉は、「登場人な指標によるからである。言うまでもなく、この〈私〉は、「登場人な指標によるからである。言うまでもなく、この〈私〉の人」といているだりに一層際立った対照の効果を生み出すのである。続く「父の叱責」けに一層際立った対照の効果を生み出すのである。続く「父の叱責」けに一層際立った対照の効果を生み出すのである。続く「父の叱責」けて一層際立った対照の効果を生み出すのである。続く「父の叱責」の章は次のような一節で始まっている。

かに聞き、またひそかにそれを繰り返すからです。 どの底で、彼に叫ばせた次のような言葉を、ときおり私自身のないの底で、彼のなかに私を認めるからです。あなたが、深い苦るからです。彼のなかに私を認めるからです。あなたが、深い苦るからです。彼のなかに私を認めるからです。あなたが、深い苦なからです。おなたの差し迫った寓話を思い出しをして、際まずいています。あなたの差し迫った寓話を思い出し

いるのに、私は飢えて死にそうだ!」[477-8] 「父の家にいる僕だちがいくたりも、ありあまるパンを食べて



る。私の心もあのような愛情の暖かさには溶けてしまう。私はそ私は父 [との語、以下しばらくは Père と大文字標記] の抱擁を 想像す

えあるのだ。 て去った青い屋根を再び目にするとき、胸をときめかせる者でさ像するのだ。私はそれを信じる。私は、丘のはずれで、かつて捨れ以前の苦悩さえも想像する。ああ、私は望むものをなんでも想

れる。そして、まだ放蕩息子とは行動を一にしないものの、話者は使用された動詞の変化〔穏像する〕→「信じる」→「である」)によって保証さて、一種の独白を形成する。同時に、放蕩息子との同一化の過程は、各文頭に繰り返される〈私〉は、もはやいかなる対話者の指示も捨

いまや「登場人物」として語り始めるのだ。

り慌てて祝宴の準備をするな!
った仔牛の用意をしているのがすでに見える……止めよ! あまへるために、何を待っているのだろう。——皆が待っている。肥ではとの私は、その家の方へ駆け出して行くために、家のなかに

に呼びかけ、各対話の進行に立ち会おうとするのである。続いて彼は、自分自身の態度を決めるために、すでに帰宅した分身

兄があなたに耳打ちしても、父よ、彼の言葉を通して、ときにあ日になって父がおまえに何と言ったか、まず言ってくれ。ああ、放蕩息子よ、私はおまえのことを思う。再会の祝宴のあとで、翌

も 4281

序言には、あらゆる解釈を洗い流されたキリストの真正の教えに直

物間の対話の次元に移されるのである。 物間の対話の次元に移されるのである。 の二つの段落では、冒頭でのキリストへの呼びかけが、話者の感情の二つの段落では、冒頭でのキリストへの呼びかけが、話者の感情を注意しなければならない。かくして、問題は寓話の内部、登場人を開かせて欲の寓話内への侵入につれて、最終的には、その「声」を聞かせて欲の寓話内への段落では、冒頭でのキリストへの呼びかけが、話者の感情接触れたいという願いが隠されていることはすでに指摘したが、こ

註

- (1) ジッドの没後編纂されたプレイアッド版作品集(Romans, récits et soties, œuvres lyriques, Gallimard, 1958) は、少なくとも『放蕩息子』に関するかぎり、必ずしも最良のテクストを提供しているとは言い難い。しかし、研究者の間でも同版が広く利用されていることを考慮して、作品からの引用については、これによるページ数を文中[]内に示し、自筆原稿ならびにしたようでは、これによるページ数を文中[]内に示し、自筆原稿ならびにした。
- (2) この一節はすでにイレイン・カンカロンによって紹介されて

(ドゥーセ文庫、7 1166-2, f° 2) によって補なう。

(ドゥーセ文庫、7 1166-2, f° 2) によって補なう。

- (α) Cancalon, article cité, pp. 355-7.
- (4) «Lettres à Beck», op. cit., p. 400
- いし非限定を読みとろうとする。V. Brée, op. cit., p. 191.

(6) ただし、ブレは、この小文字標記にむしろ批判対象の拡大な

- (7) 「美学的見地が、私の作品を正しく語るために身をおくべき唯
- (∞) «Lettres à Beck», op. cit., p. 620.
- (Φ) V. Claude MARTIN, La Maturité d'André Gide, Klincksieck, tome I [seul paru, 1977], pp. 531-2.
- (10) この点で筆者は、「『背徳者』序文の〈私〉は小説のどの登場 人物ともまったく同等に虚構の存在である」(George W. Ireland, *Le jeu des "Je" dans deux récits gidiens», André Gide 6, Lettres Modernes Minard, 1979, p. 70) と考えるアイアランドとは見解を 異にする。また、彼はさらに言う—— この作品において「〈序 異にする。また、彼はさらに言う—— この作品において「〈序

- (11) ここで筆者は、メザニ=レオナールが提案した「序文」(Préface)と「序言」(préambule)の区分に従っている(v. Martine Maisani-Léonard, André Gide ou l'ironie de l'écriture, Les Presses de l'Université de Montréal, 1976, p. 33)。付言すれば、『放蕩息子』の自筆完成原稿、初版のいずれにおいても、「序言」と後続子』の斜字体印刷についても、プレイアッド版等、他作品の印言」の斜字体印刷についても、プレイアッド版等、他作品の印言」の斜字体印刷についても、プレイアッド版等、他作品の印言が表現のではすべて後続部分と同一の活字で刷られている。
- (1) この文の綿密な分析はすでに次の論文でされている。Breda CIGOJ-LBBEN, «Le style d'André Gide dans *Le Retour* de l'Enfant prodigue», Linguistica, vol. XCIII, 1978, pp. 201-3
- (A) V. Pierre Masson, André Gide, Voyage et écriture, Presses universitaires de Lyon, 1983, pp. 269-72.
- (当) V. Jean GUIGUET, «Le Retour de l'Enfant prodigue: la quête gidienne », The French Review, vol. XXIII, 1950, p. 370.